重だったから木簡を使ったという説明です。これは一面では正しいのですが、必ずしも正鵠（せいこく）をえていません。実際には木と紙のよい点を熟知して使い分けていたのです。紙木併用が日本の古代の木簡のあり方です。そのうえで、木簡の特徴の一つは、再利用が可能だということです（**図1**）。不要になったら何度でも削って再利用することができます。メモ的な用途に使うには最適です。もう一つの特徴は、木ですから丈夫で壊れにくいことです。たとえば、租税の荷札として使うのに大変便利です（**図2**）。遠距離の運搬でも壊れたりしません。こうした木としての特徴を十分熟知して、紙と木とを使い分けていたというのが日本の木簡の特徴です。

また、発掘調査によって土の中から見つかるということは、古代の人たちにとって私たちが目にする木簡は、あくまでもゴミであるということです。つまり、木簡がゴミとして捨てられる場合が多かったことを意味しています（墓に埋葬したり、まじないや祈願に用いたりする場合は、厳密にいえばゴミとはいえず、廃棄以外に目的がありますが、現実的には残そうとしたとはいえないでしょう）。

ゴミが私どもにとって、宝になっているという点を強調しておきます。さらに、木簡は当座の用途に用いることが多く、長期的な効力や保管は期待されていなかったという事情とも密接に関係してきます。残そうとして残した資料ではありません。私どもが偶然取り上げた資料です。木簡が出土文字資料であるということと、その使われ方とは不可分の関係にあります。

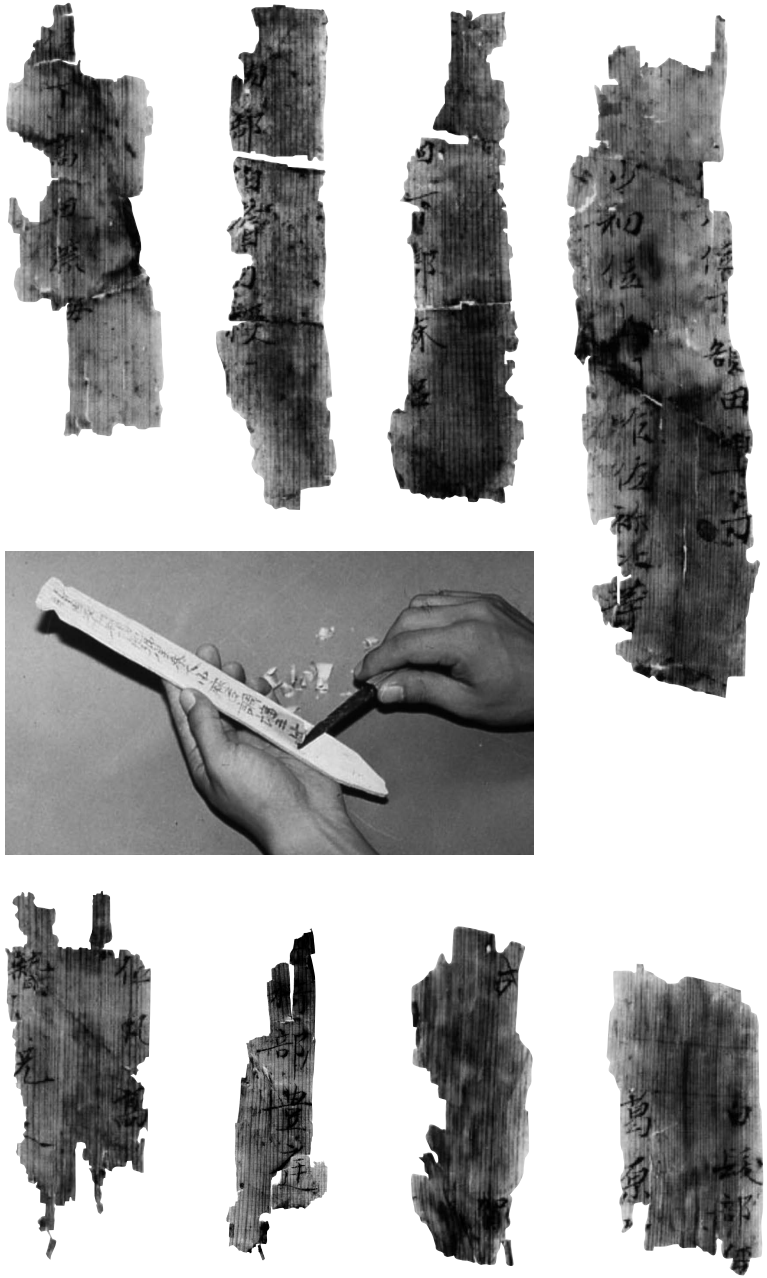

図1　木簡の再利用のイメージと削屑（けずりくず）の例（原寸の約70％）